

長屋から始まる「コミュニティシェア」

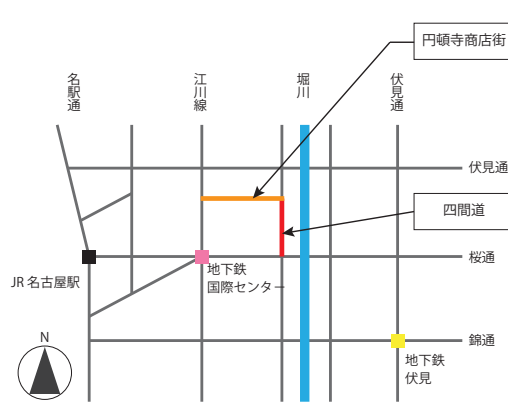
空家が増える中で、何を生かしていくのか。

ヨーロッパでは数百年前の建物がそのまま残り、その国の歴史や文化を今も伝えている。今の日本では、個人の嗜好により様々なデザインの建物ができチグハグな町並みを生んでいる。これから「生かしていく建物」「残していく建物」は、日本らしい木造の長屋や古民家であって欲しい。

高層のオフィスビルやデパートが立ち並び名古屋駅から東へ約1kmにある「四間道」。元禄13年(1700年)の大火の後、防火の目的で道幅を四間(7m)とされたこの通りは、現在も古い長屋や蔵が残り名古屋市の町並み保存地区にも指定されているエリアである。そして、保存地区に指定されたエリアの西側にも古い長屋があり、その北側には円頓寺商店街もある。しかしこれらの建物も住まい手を無くし空家となってしまふと、取り壊され空き地となり、駐車場やコンクリートのマンションになってしまいかねない。今人気のシェアハウスのように四間道の町並みに共感するあらゆる世代が長屋をシェアし、これをきっかけにした「四間道コミュニティ」として保存地区全体へ広げられないだろうか。



デパートとオフィスが入る名古屋駅ビル



駅ビル向かいの映画館などが入る複合施設



数件が空家となった長屋



シャッターが多い商店街



ボツンとなった民家



民家のすぐ横のパーキング



店舗として生かされている長屋



◇現在の「四間道」の様子

- 蔵が残っている部分
- 長屋が残っている部分
- 長屋を店舗として利用している部分
- 木造以外の建物(マンション等)
- 駐車場



保存地区内の蔵



浅間神社より北側が保存地区

◇一棟の長屋に複数世帯で暮らす「長屋シェア」

空家となった民家や長屋は取り壊されてしまう事になるであろう。そこで一軒の家を複数で住むシェアハウスのように、一棟の長屋を複数の世帯で住む「シェア長屋」という考えはできないだろうか。長屋の通りに面する部分は景観のために修復を。長屋の中で今住んでいる方はそのまま住み、空いている住居はリノベーションし賃貸住宅とする。賃貸部分へは単身者や家族世帯などの若い世代が入ってくる。町並みに魅力を感じ、人とのつながりを求める共通の意識を持った人々は温かいつながりを生んでいく。点在する民家を生かした「シェア民家」で人とのつながりができ、「遠くの親戚より近くの他人」的關係が生まれることを期待する。

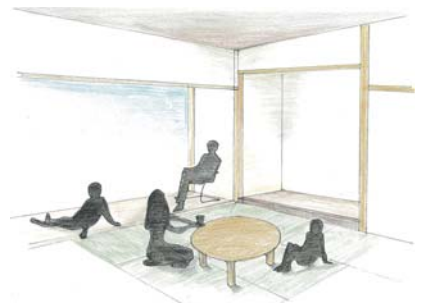


◇あちらこちらに目立つ駐車場

商店街の北側に大きな駐車場がある。駐車場の機能を限定した場所に集約させる。保存地区内への駐車場は最小限に。車の通りが減れば人にとっては安全な道に。高齢者も安心して歩けたり、子供にとっても遊びのスペースが生まれるかもしれない。空いた空間は、新しいコミュニティで必要となる、保育・医療の基盤を設ける。これ以上のまばらな駐車スペースが増えない事を望む。

◇品揃・業態に特化した商店街へ

この商店街もシャッターを閉めた店舗が多い。ここは名古屋駅のすぐそば。新しいモノ、便利なモノは名古屋駅周辺のデパートや地下街へ出れば何でも手に入ってしまう。そこで、円頓寺商店街では四間道コミュニティに住む人の日常生活に密着した商店街に。現在シャッターを下してしまった店舗は、生鮮食料品および日用品と、飲食を中心とした店舗として復活させてはどうだろうか。近くにはオフィスや学校があるため昼時にはランチ客も見込める。朝活・朝型の働き方が注目されている今、名古屋らしくモーニングの店舗を充実させてみたい。また、これら店舗は高齢者の自宅への配食サービスや、「シェア民家」へケータリングサービスもおこなう。



◇周りの民家が壊され、ボツンしている家は開放「シェア民家」

大人は読書や将棋をしたり、子供は宿題をしたり、ママは趣味のハンドメイドをしたり高齢者や、子供、ママなど様々な世代の長屋住民が集まるコミュニティ空間へ改修。夏の暑い日は涼み、寒い日は暖を取にも人々が集まる。ここで高齢者がケータリングを取ればデイサービスに近い空間になるのでは。コンクリートの「施設」ではなく自立した人が集うシェア民家であれば、出かける意識が変わるはず。コミュニティ以外には、ギャラリー、店舗、貸しスペースとしても活用。